



熱処理業界の最近

福原 哲一 日本電熱協会 理事

ここ数年、設備投資が好調です。設備製作部門はどこも満杯で、納期が追いつかないほどです。ただし、それ以前の不景気の影響を引きずっており、価格は残念ながら値崩れしたままの為、仕事は目の回るほど忙しいが利益はそれほどついてこないというのが実状です。数年前までは、公共投資削減・国内産業の海外シフト化等で、熱処理業界の設備投資は冷え込んでおり、需要家の熱処理部門では次第に縮小傾向となり統廃合あるいは海外工場への転属等で国内生産ラインでの熟練者がだんだんいなくなりました。メーカー側でも電力装置・熱処理装置部門の縮小・統廃合が進んでおりました。

それにつれて、設備仕様には新人作業員にも操作可能な設備（全自動化）要求が益々増えてきています。当然に設備については操作の容易性・段取りのしやすさ・均一な出来上がりなどが要求されます。

しかしながら、製造業の生産ラインにおいては、製品の品質の維持・安定、トラブルに対する迅速な対応なども要求されます。今生産されている状況が何かいつもと違う、些細な異常を見つける目が必要となります。また新規品種対応や品質問題解決にあたりどの方策が最適かの迅速な判断はやはり経験者・熟練者が必要となります。さらに熱処理というのは料理に相通ずるところがあって、考え方が非常によく似ております。与えられた食材（様々なワーク・材質）に対して、こう料理（火加減・味付け・隠し味）（加熱・冷却）するというわけですが、出来上がる料理は、シェフにより千差万別となります。料理方法をどうするか、料理方法のどこを調整すれば味がどう変わるかは、やはり経験者・熟練者頼りです。

全自動化されたラインを持つ大手メーカーにおいても、“マイスタ制度”とか呼ばれますが、一時統廃合された熟練者が最近元の職場に呼び戻され、熱処理のノウハウの伝授・アドバイスをを行い、熱処理の後継者育成に尽力しているところも出てきています。設備の維持管理あるいは、熱処理仕様の見極め・決定にはやはり熟練者が必要不可欠です。

製造業として今どの方向が正しいかは、10年後でないともわからないのかも知れませんが、

- ・装置設備は、より高度に・よりシンプルに・より安く
- ・熱処理では、まず“もの作りは人作りから”

の二本柱はどちらも大切に、バランスよく保ち維持向上させていくことが、熱処理業界では今でもこれからも必要不可欠ではないかと考えています。

弊社といたしましても上述の考えを基本に、電気加熱システムの普及拡大の一助となるよう努めてまいりたいと考えております。

今後ともよろしく願いいたします。

（ふくはら てつかず） 高周波熱錬(株)常務取締役